

春植(秋掘り)球根の収かくと 冬期間の球根貯蔵について

(その一)

札幌市農業センター 小西敏昭

本州よりひと足早く秋を迎える北海道で弱い霜を見るところになると、ダリア、ラジオラス、カンナ、あるいは、露地植の球根ベゴニアなど、春植球根の掘上時期に入る。夏から秋にかけて立派な花をたくさん咲かせ、良質の球根がたくさん収穫できたのに、春までに凍害などによって球根が凍死したり、腐敗球がたくさんできたりすることが多い。そこでおもな球根類について、正しい収穫の方法と越冬貯蔵の方法を知ってもらうためその要領を述べることにした。

一 ダリア

ダリアの発芽、伸長および球根(塊根)の肥大・充実にはいずれも日長時間が大きく影響している。

品種によって多少の差はあるが、一般に地上部(莖葉)の生育伸長は日長十二時間以上で進み、十二時間以下の日長では生育が抑制されるか、あるいは停止する。

一方、球根の肥大については、日長が十二時間までは肥大が促進され、この限界日長を超えた長日条件下では肥大が抑制されるか、あるいは単に根として伸長する。

すなわちダリアの球根は短日条件下で肥大充実するのである。そこで、新品種の増殖や、分球数の少ない品種を多量に生産する場合は、人工的に短日処理を行なって球根の肥大充実を行なっている。

これらのことから、良い球根を得るためには、(イ)夏の長日条件下で十分莖葉を繁茂させ、秋の短日期間を長くして球根の肥大

充実を促進する。(ロ)秋の短日期間を長くするため、霜のおそい場所を選んで栽培する。(ハ)掘上げ時期は、莖が半分以上枯れてからにするなどの配慮が必要となる。

●掘上げ収かく

(イ)莖葉が枯れたら地面から二〇センチ程度のところで莖を刈取る。(ロ)堆肥用のホークで両側から掘上げる。この場合ショベルを使っても良いが、球根の付け根(首)の部分 が折れたり切れたりして、球根が使えなくなる人が多い。フォークを使う場合でも、こじ上げるようにすると首が折れやすから、二本のフォークを両側から差込み同時に持ち上げるような気持ちで掘上げる。と事故球が少なくてすむことになる。

掘上げたならば分球に入る。土壌が比較的軽い砂質系の場合や、火山灰性の場合には、小さな箒か毛の長い刷毛のようなもので球根についた土を落とすことができるが粘質な土壌や、土がしめり過ぎていて球根は土が落ちにくく、無理に落とそうとする場合は、首の部分の部分が折れてしまうから、この場合は少し乾燥させたのち球根の付いた莖を保持上げ、莖の切断面直上から、木槌でコンコンと軽くたたくと大部分の土を落とすことができる。

●分球

ダリアの球根は莖を中心にして数個または十数個が放射状に付いているから、その一つ一つに芽を付けて切断し貯蔵を容易にするための分球作業が必要となる。

分球は、できれば球根掘上げと同時に直

後であれば、新芽がみずみずしくふくらんでいて見やすいから分球しやすくする。

掘上げ後日数が経過するにたがって球根は休眠期に入るので芽も表皮の下にかくれるような形となって見にくくなる。

しかしながら翌春気温が上昇してくると休眠が破れて萌芽してくるから、この時期に分球するのも一策である。反面この方法によれば掘上げた球根の貯蔵に多くの場所を要し、さらに球根の積重ねによる重さで、下になった球根の首が折れる場合が多く、かつ莖から腐敗が入ることもあって得策ではない。

これらのことから、大量に分球する場合は掘上げと同時に二つまたは四つに大きく割って仮貯蔵し、冬期の比較的暇な時期に少しずつ分球しながら本格的な貯蔵をする方法が行なわれている。

分球は、主として剪定鋏を使うが、細身のノミまたは良く切れるナイフを併用すると作業が楽である。

まず土を落とした株を持って球根のつけ根の部分(翌春の芽の部分)を箒かブラシで払ってきれいにし、芽が見えやすいようにする。次に株を二つあるいは四つに大きく割って、さらに一球ずつに分球していくのである。この場合一球に必ず一芽を付けることと、芽の位置があまりにも先端につくことにならないよう、注意しなければならぬ。芽が球根の先端ぎりぎりのところに付いているものは、貯蔵中の乾燥によって枯死したり、莖から腐敗が入ったりすることがあるからである。

もちろん芽の付いていない球根や古い球根（春に植えた親球）は首の所から切取って捨てるほか、首が折れて皮だけで茎に付いているようなものも捨てなければならぬ。また芽が茎に付いているものは、その茎を球根の先に付けて切取っても、茎が乾燥し球根の先に付けて切取っても茎が乾燥したり腐敗したりすることが多いから、これも捨てた方がよい。

結論として、分球保存する球根は充実度が高く首が強く芽が確実に付いていてかつ芽の位置がなるべく先端から遠い位置にあるものが良いことになる。もちろん病気のあるものは不適当である。

●貯 蔵

ダリアの生育に必要な最低温度は8℃前後であるから球根の貯蔵温度は8℃以下とし、凍害を受けない範囲の温度（最低3℃）に保つことが必要である。

また、球根内の含水率によって耐凍性に差があることを考慮し、球根に皺が寄らない程度の乾燥状態で保存することも大切である。

普通多量に貯蔵する場合は、専用の貯蔵庫を作って利用するが、経費も多くなるから、馬鈴薯の貯蔵方法にならって、土まじゅう式に貯蔵することが多い。

この場合、馬鈴薯よりも湿度を下げる必要があるので、球根と球根の間に十分なモミガラを入れ、外部から雨水や、地下水が浸透しないよう、周囲に深い溝を掘って排水を良くすることが大切である。

貯蔵に当たって品種名を付けたラベルを

付けるが、リノゴ箱にモミガラと、球根を交互に詰めて箱の外に品種名、数量を記入するのも一策である。この場合は、箱のまま土の中にいけることになるが、箱の外側にもモミガラを敷詰めることが大切である。

少量貯蔵の場合は、ダンボール箱にのこくずを入れ、その中に球根を入れて室内に保存することもできるが、最低温度を維持するためには、(イ)のこくずの量を多くすること、(ロ)建物物が防寒構造でない場合はダンボール箱を二重にし、内側と外側のダンボールの間にウレタンチップか布切れなどを十分詰めて断熱層を多くすること。(ハ)室内貯蔵の場合は乾燥によって球根の消耗が強いから、未熟球や、小球の保存には向かない。(ニ)ひと月に一度程度のこくずをしめらせるとかなり球根の乾燥を防ぐことができる。(ホ)少量貯蔵の場合は一球ごとに球根に品名を書いておくことと良い。

結論としてダリア球根の貯蔵法はそれぞれの地方に応じて考えるべきもので、要は凍害を受けない温度を確保し、芽が伸長しない程度の低温とすること。過湿、過乾を防ぐこと。ネズミなどの害を受けないこと、などを考慮すれば良いことになる。

したがって、屋外で貯蔵する場合の盛土の厚さや周囲の排水の大きさなども寒さに応じた土の深さ、あるいは地下水の位置による排水の深さを考えれば良いこととなる。

なお、融雪水によって球根が腐敗することが多いから積雪の多い地方では融雪直前に室内に入入れる工夫も必要となる。

